

# シオニズムをめぐるオリエンタリズムと カウンター／アンチ・オリエンタリズム

— 抜け落ちる「ロシア」 —

鶴見太郎

## I. 序

シオニズムやそれに端を発するパレスチナ問題は様々な矛盾が複雑に集積した場であると言われる。ところが、ある面でシオニズムは意外と簡単な形で、しかも立場の如何にかかわらず同じように理解されてきた。それは、シオニズムは一般においても、学界においても「西洋」に契機を持つ思想・運動とされてきたということである。そして、重要なことは、具体的に説明されるとき、この「西洋」はほとんどの場合、無意識的にはあれ、「西欧」である。後述するようにこうしたシオニズム観はある部分では史実に反するが、それにもかかわらずこうした見方が大勢であることは、単なる偶然ではなく、あるすこぶる強い力がそこに働いてきた結果であり、それ自体本稿の主題と本質的に関係している。本稿は、従来のシオニズム観が少なくとも部分的に史実に反することを主張するというよりも、歴史社会学的観点から、シオニズムそれ自体が、その観察者も巻き込まれ、その結果ある一定の規則性を持ったシオニズム観を生み出してしまったところの枠組みに本質的な影響を受けていたことを示すものである。

## II. オリエンタリストとアンチ・オリエンタリスト共通の「物語」

今日に至るまで高度に政治問題でもあるシオニズムの観察には、それを肯定する場合も批判する場合もE・W・サイード(Said [1978=1993])の言うオリエンタリズムが別々の意味で深く関係

してきた。単なる民族対立と見なされる場合もあるため、シオニズムをめぐる議論に必ずしもオリエンタリズムが絡んでくるとは限らないが、概してオリエンタリズム的世界観はシオニズムを肯定する場合に関係し、オリエンタリズム批判あるいはアンチ・オリエンタリズムはシオニズムを批判する場合に関係すると言え、また、こうした議論はかなり有力な議論となっている。まずはそれぞれについて概観することから本稿の議論を始めたい。

### II.1. オリエンタリストの理解

オリエンタリズムの立場からは、シオニズムは「先進的な西欧」をユダヤ社会、ひいては中東地域に吹き込む新進気鋭の思想・運動であるとして肯定的に理解される。これは現代イスラエルの公式的な歴史と重なるものである。概して言えば、国民国家時代のマイノリティの排除や反ユダヤ主義（反セム主義）の激化ということに加え、「奴隷状態」を脱して「自立」することを重要な教義とする「近代」におけるユダヤ民族の然るべき復興や伝統的なユダヤ共同体を「近代化する」ものとしてシオニズムを捉えつつ(e.g. Avineri [1981], Shimoni [1995])、シオニズム以前からパレスチナにアラブ人が住んでいたことに対しては、いわば「文明化の使命」や土地を有効活用できる者にこそ所有権が渡るというアメリカ史でいう「開拓者精神」に近い論理で辻褃を合わせるものである(cf. Said [1979=2004], Finkelstein [2003: Ch. 4])。そして、近代化

を達成したユダヤ社会としてイスラエル社会が描かれ、社会学では、代表的な近代化論者の一人でもあるエルサレム・ヘブライ大学名誉教授 Sh・N・アイゼンシュタット(e.g. Eisenstadt [1967]) が描き出すイスラエル像がその一例である。

そして、こうしたシオニズム観は、一般に「シオニズムの父」と呼ばれるドイツ語圏で活躍していたジャーナリスト Th・ヘルツルに関する研究にも当てはまる。彼がそう呼ばれる分かりやすい理由は、ロシア帝国発のシオニズム運動が今ひとつまとまりと成果を欠いて行き詰まっていた中で、シオニズムの古典とされる『ユダヤ人国家』(Herzl [1896=1991])を發表し、西欧ユダヤ人と東方ユダヤ人のシオニズムを統合する形で、世界シオニスト機構を立ち上げて(1897年)組織的にシオニズムの基礎を築き上げたという彼の功績にある。また、ユダヤ人国家建設の許可証を得べく外交交渉に奔走していた中で倒れたという殉教者的な英雄性も少なからず関係している。

しかし、彼が神格化される要因として本稿が最も重視するものは、彼が西欧ユダヤ人(出身はブダペストだが、ドイツ語の環境で過ごし、典型的な西欧ユダヤ人と見なされていた)だったということである。ヘルツルに関する研究史を概観した Y・ゴールドSTEIN(Goldstein [1995])によればシオニスト指導者の中でヘルツルだけが群を抜いて伝記や研究書が多く、その数は40以上にもなるという。そして、時とともにその傾向は弱くなっていったが、ヘルツルが理想化されて描かれることが多く、その反面、東方ユダヤ人が無力な存在として表象される傾向があった。後で言及する「ウガンダ」論争においても東アフリカでのユダヤ人国家建設計画を掲げたヘルツルに反対したロシア系が批判的に描かれている。ある程度の客観性を持った研究書として現在でも引用される諸研究書においても、西欧中心的な視点からのそのような記述

がなされる傾向が強いという(Goldstein [1995: 195-9])。これだけではまだ彼に対する過大評価の原因が彼の西欧ユダヤ人としての属性にあったとは言えないが、以下の議論からはこうした見方が少なくとも可能であることが明らかとなる。

## II.2. アンチ・オリエンタリズムの理解

アンチ・オリエンタリズムの立場は、サイドのオリエンタリズム批判と歩調を合わせる形で批判的にシオニズムを理解するものである。この場合、シオニズムは「横暴な西洋」と結びつけた理解のされ方となる。実質的には西欧(+北米)を意味している「西洋」に引き付けてシオニズムを批判するサイド以前からある素朴な議論としては、オリエンタリズム批判というよりは帝国主義ないし植民地主義批判に属するものではあるが、それが西欧の帝国主義の関数だという理解がある。例えば、1977年にソ連科学アカデミー東洋学研究所から出版された『国際的シオニズム—歴史と政治』(Институт востоковедения, Академия наук СССР [1977])という論文集において、シオニズムは基本的に西欧や北米における資本主義において発展したユダヤ人ブルジョワジーがさらなる発展先を求めたものとしてシオニズムが捉えられている。

しかし、西欧とシオニズムを結び付けた現在まで続く議論を整備したのは、何と言ってもサイドの『オリエンタリズム』および『パレスチナ問題』(Said [1979=2004])である。例えば彼は後者の中でシオニズムの用いた戦略をこう説明している。

シオニズムを魅力的なものとする——つまり最も深い意味での純粋な援助者を惹き寄せる——ために、その指導者たちはアラブを無視しただけではない。アラブと対処する必要が生じた場合には、彼らは相手を明

瞭化し、特殊な方法で理解し操作しうる存在として西洋に提示した。シオニズムと西洋との間には、かつても今も、言語とイデオロギーの共同体が存在する。

(Said [1979=2004: 41])

サイドはシオニストの自己のポジショニングの問題を論じている点で、シオニストを単純に「西洋の手先」として見る先の議論とは異なるが、結果的にシオニズム全体を「西」に位置づけることとなった。これ以降、ポスト・コロニアリズム研究の活性化の中で、イスラエル・パレスチナのアラブ人のみならず、「東洋視」されるという点では同じく文化的に劣位に置かれている中東出身のユダヤ人に照準を合わせながら、他方で覇権を握るヨーロッパ系を「アシュケナジーム」としてひと括りにして現代のシオニズムやイスラエル社会を分析する研究が蓄積されていった(e.g. 白杵[1998], Kimmerling [2001], Shafir and Peled [2002])。サイドの議論を下敷きにして、現在まで続くイスラエル社会におけるエスニック・ヒエラルキーの源泉を先行研究を整理しつつ社会的に考察したA・カズーム(Khazzoom [2003])は、西欧において東洋的な存在と見られた西欧ユダヤ人が、東方ユダヤ人にその「ステイグマ」を転化させ、さらにパレスチナに進出した後者はそれを中東ユダヤ人に転化させ、そして、最後はアラブ人が「東洋化」されるという「オリエンタリズムの大連鎖」を論じ、イスラエル社会における支配文化の西洋志向を指摘している(なお、ここでステイグマとしての「東洋」の「押し付け」が「東方」に一方通行的に転移されていったとされていることに注意されたい)。もちろん、現代のイスラエル社会においては実際に「アシュケナジーム」の中に、最近の問題として片付けられる旧ソ連からの新移民を除いて問題となるような「境界」があまり見出せないことは事実であ

表 シオニスト指導者の出生地

| 地域    |         | A[%]     | B[%]    |
|-------|---------|----------|---------|
| ロシア帝国 | ウクライナ   | 30       | 6       |
|       | ベッサラビア  | 2        |         |
|       | リトアニア   | 19       | 6       |
|       | ベラルーシ   | 26       | 6       |
|       | ラトヴィア   | 3        | 1       |
|       | エストニア   | 1        |         |
|       | ポーランド*  | 23       | 5       |
|       | 定住区域以東  | 4        |         |
|       | ロシア帝国計  | 108[55]  | 24[65]  |
| 東欧    | ルーマニア   | 3        | 1       |
|       | ボスニア    |          | 1       |
|       | ハンガリー   | 4        | 2       |
|       | ガリツィア   | 12       |         |
|       | ブコヴィナ   | 1        |         |
|       | スロバキア   | 1        |         |
|       | チェコ     | 3        |         |
|       | 東欧計     | 24[12]   | 4[11]   |
| 東方計   | 132[68] | 28[76]   |         |
| 西欧    | オーストリア  | 8        | 1       |
|       | ドイツ     | 14       | 3       |
|       | イギリス    | 12       | 1       |
|       | フランス    | 2        | 2       |
|       | イタリア    | 3        |         |
|       | スイス     | 2        |         |
|       | 西欧計     | 41[21]   | 7[19]   |
| 北米    | 米国      | 12       | 2       |
|       | カナダ     | 2        |         |
|       | 北米計     | 14[7]    | 2[5]    |
| その他   | パレスチナ   | 6        |         |
|       | インド     | 1        |         |
|       | 南アフリカ   | 1        |         |
|       | その他計    | 8[4]     |         |
| 計     |         | 195[100] | 37[100] |

出典：以下を基に筆者作成。  
A：Edelheit and Edelheit [2000]の“Zionist Leadership (2. Major Zionist Leaders)”の項目に記載されているシオニスト指導者195人の出生地（地域名は出生当時(19世紀～20世紀初頭)のもの）。  
B：シオニズム思想の標準的・古典的なアンソロジーであるHertzberg (ed.) [1997]に登場する、37人の出生地。  
M・M・ウスイシュキンなど、要人であるが体系的な思想を発表していない人物は含まれない。  
\*ドイツ領・ハブスブルク帝国領を含めた全てのポーランドである。なお、ポーランドの大部分はロシア領だった。

り、研究者が勝手にヨーロッパ系を一緒くたにしているわけではない。しかし、こうした「雰囲気」の中、ヨーロッパ系はシオニズムの初期に関して遡及して一緒くたにされてしまう傾向がむしろ強まっている。

そしてこうした文脈で、ヘルツルはやはり引用されることになる。よく引用されるのが、ヘルツルが『ユダヤ人国家』において、シオニズムがユダヤ人以外のヨーロッパ人にも有益であることを示すために語った次のくだりである。「ヨーロッパのために我々はその地〔パレスチナ〕でアジアに対する防壁の一部を作り、野蛮に対する文化の前哨の任務を果たすであろう」(Herzl [1896=1991: 33-4])。

以上のように、どちらの立場においても初期のシオニズムの中心にヘルツルに象徴される西欧を置く「物語」が形成されており、この点に疑問が呈されることが極めて少なくなっている。現在のところ、中立性を装う研究であっても基本的には以上の図式を抜け出せていない。

### III. 近代ヨーロッパ・ユダヤ社会における「東西」とシオニズムの起源

そして、人口学的な点では知られてはいるものの、実質的には忘れられてしまい、ましてや思想的には省みられることがほとんどないのが、シオニズムのロシア帝国における起源である。シオニズム研究においては常識であるにもかかわらずあまり強調されないことであるが、指導層に限って言ってもシオニズムが始まったのも、その母体となったのもいわゆる東方ユダヤ人、中でもロシア帝国のユダヤ人だった(表参照)。実際にパレスチナに移民した数ではヨーロッパ系の中では圧倒的に東方ユダヤ人の割合が高い。1900年前後のユダヤ人口の中心もロシア帝国西部にあった<sup>1)</sup>。

そしてこのことは単に人口学的に重要なのではない。以下で示していくようにシオニズムの

思想的な根幹にかかわる2つの意味での重要な問題をロシア帝国という場は孕んでいたのである。1つ目の意味は、次節で概観するようにロシア帝国が西欧諸国社会と異なり、多様な集団を含んだ文字通りの帝国であり、政府を含む多くの構成員の将来像においてもそうだったという点である。そして運動としてのシオニズムは、ヘルツルが現れる約15年前に、1881年のウクライナ南部を中心に発生したポグロム(反ユダヤ暴動・虐殺)や翌年のユダヤ人に対する特別法(通称「5月法」)を機にこのロシア帝国のマスクリーム(啓蒙主義者)の間で始まった。ロシア・ユダヤ人の間でも圧倒的に少数派だったが、「ヒバット・ツィオン」(シオンの愛)などの組織が緩やかに形成された。

2つ目の意味は、シオニズム以前からヨーロッパ・ユダヤ社会に「東方(東欧)ユダヤ人」<sup>2)</sup>(概ねドイツ語圏よりも東)と「西欧(西方)ユダヤ人」(ドイツ語圏以西、時にさらに北米の「西欧的」なユダヤ人も)という「境界」(もちろん想像上の)が存在していたという、当時においても現在においても周知となっている事実と関係している。シオニズムに限らず、例えば米国のユダヤ史においてもこの2つのユダヤ人は重要なテーマとなるものであり(cf. Hertzberg [1989])、この「境界」はヨーロッパ系のユダヤ社会においてはかなりの程度実体視されてきたものだと言えよう<sup>3)</sup>。もちろん、ロシア・ユダヤ史の碩学J・フランケルが釘を刺すように、文脈を明確に限定せずにむやみやたらとこの東西の相違を強調することは危険である。しかし、それでもやはり、これもフランケルが指摘するように、19世紀後半からのユダヤ人の政治社会を見るにあたって、こうした「東西」の区分は有用なのである。なぜなら、「東西の区分は単に分析概念であるだけでなく、それ自体の歴史を持っている」からである(Frankel [1992: 84])。フランケルも言及している

が、例えば後で登場するロシア帝国出身のアハド・ハアムは「自由の中の隷属」（1891年）などで西欧ユダヤ人を市民的な権利のために「ユダヤ」を犠牲にする同化主義者と位置付けるなど、ヘルツル登場以前からシオニズム内外で「東西」の「境界」は少なからず意識されていた。

ところが、こうした2つの意味での重要性にもかかわらず、「ロシア」ないし「東方」が積極的に考察の基軸に据えられることはほとんどない。もちろん、ロシア・シオニズムを中心に据え、ユダヤ人社会主義組織であるブンドなどを含めたロシア・ユダヤ社会の文脈でシオニズムを検証した研究もないわけではないし(e.g. Frankel [1981])、とりわけ「ヘルツル対アハド・ハアム（後述）」という形で西欧シオニズムと東方シオニズムの相違が論じられることもそれほど珍しくはない(e.g. Hertzberg [1959→1997], Almog [1987])。だが、「ユダヤ史」の枠組みで研究されているための限界ということでもあるが（実際、思想史的研究は多いが、知識社会学的研究は極めて少ない）、その場合に知識社会学的に読み込まれる背景は通説の域を超えない素朴なものであるし、東方ユダヤ社会の方がユダヤ人口が多くユダヤ共同体が伝統的な形で確固として存在していたといったことが言及される以外は、西欧にも共通する反ユダヤ主義や近代化、ナショナリズムの流行といった要因が触れられる程度であり、「東西」の「境界」そのものが及ぼした影響についてもほとんど検討されていない。

このように「東」ないし「ロシア」が抜け落ちてしまう原因としては、もちろんドイツ発祥のホロコーストのインパクトの強さも大きいだろう。また、近代ユダヤ学がドイツで発展したことも大きく、言語的な障壁などもあってロシア・東欧の研究が手薄になるということも研究史的に言える。

しかし、以下で論証するように、「ロシア・フ

ァクター」はそのようなことで看過できるほど軽いものではない。にもかかわらず実際にはほとんど看過されている。それはなぜか。この問いに対する答えの重要な部分は、「ロシア・ファクター」を検証していく中で見出すことができるように思われる。

#### IV. シオニズムとロシア帝国

まず今挙げた第1のロシア帝国とシオニズムとの政治社会構造的な意味連関関係について、詳細は別稿に譲るが、ここでごく簡単に概観しておきたい<sup>(4)</sup>。このことは、西欧を中心に据えるシオニズム観が思想的にも史実に反するという根拠の1つ目となるものである（2つ目の根拠は、それにもかかわらず西欧が中心に据えられることとなった原因の考察の一端も結果的に担っているVIで提示する）。

ポーランド分割以降ロシア帝国に編入されることになったユダヤ人は西部の「定住区域」と呼ばれる地域<sup>(5)</sup>とロシア領ポーランドに居住地を制限され（現在のロシア共和国の領域への居住は厳しく制限されていた）、また、他の集団と比べると差別的な法的制限を受けることとなった。しかし、近年のロシア史学が提示するように、ロシア帝国はレーニンが「民族の牢獄」と規定したほどがんじがらめの帝国だったわけではない。大まかには古典的な帝国同様にローカル・エリートと結合することによる間接統治の形態が採られており、またそもそもロシア帝国の統治能力としてがんじがらめにするなどほとんどできなかったし、文化的なヒエラルキーにおいても、エスニック・ロシア人は西方諸民族に比べて必ずしも優位にはなかった<sup>(6)</sup>。

こうしたロシア帝国の言論空間において、ユダヤ人は人種主義的に規定されていたわけではなく（ドイツなどにおいても人種主義的なユダヤ人規定が見られるようになったのは1870年代終わり頃からであり、それが支配的になってい

ったのは第1次大戦敗戦後である)、「改善可能」なものが見られていた。ドイツのユダヤ社会において18世紀後半に始まったハスカラー(啓蒙主義)に基づいた改革によりユダヤ人が「有益」になったことが政府の側でも注目され、ロシアのマスキリームの間ではユダヤ社会を「近代化」によって帝国で同権を得る道が模索されていた(Klier [1986, 1995], Springer [1980], Stanislawski [1983], Weinerman [1994])。近年の研究が示しているように、彼らマスキリームは、その後のシオニズムがそう規定したように同化主義者だったわけではなく、ロシア帝国共通の近代的な文化を身につけることによってユダヤ人としての集合性を保存した状態でのいわゆる文化的統合を企図していたのであり、彼らが問題にしていたのは帝国内でどのように見られるかという「自己呈示」の問題だったのである(Lederhendler [1989], Nathans [2002])。

こうした中でポグロムが発生し、一部のマスキリームはそれまでの路線を変更する必要性を感じた。しかし、彼らは必ずしも帝国からの逃避を考えたわけではない。それは「流浪の民」ではなく「高尚」な「ネーション」として認知されることによって帝国において改めて同権を得ようとするという試み、つまりは「参入のための退出」だったのであり、こうして「ネーション」たる根拠をパレスチナに建設するシオニズムが産出されたのである<sup>9)</sup>(なお、メシアは待ち望むべきものであるから、伝統的なラビ(ユダヤ教の指導者)たちはシオニズムに猛反発していた)。

例えば初期のシオニズムの代表的指導者の一人M・L・リリエンブルムはかなりの人数がパレスチナに移民すべきだと述べていたが、他方で、残ったユダヤ人にとってシオニズムは役に立たないという批判に対しては次のように答えていた。

もちろん、(...)パレスチナのユダヤ人がパレスチナ以外に住む同胞を守る力があるとは誰も思っていない。だが、例えば、ペルシア人やトルコ人は、ヨーロッパに住んでいる彼らの同胞を守ることはできないが、ヨーロッパに住んでいる彼らはみな、一度も迫害を受けたことがない。それは、彼らが恐れられているからではなく、自らと同等の人々として尊敬されているからである。人は時に家のない放浪者を気の毒に思うが、その放浪者を尊敬することはまずない。ユダヤ民族〔народ〕が家のない状態をやめ、正常な諸民族の名簿に編入されれば、ペルシア人などに対するのと同様に、その一員として尊敬の態度で接してもらえるようになるだろう。

(Лилленблом [1899: 75])

## V. 東方シオニズム＝エスニック、西欧シオニズム＝リベラル？

こうして発生したロシア・シオニズムはまずはパレスチナに入植し、漸進的にユダヤ人の領域を拡大していく戦略を採っていたが、現地の厳しい現実の前に行き詰まり、また伝統的なユダヤ教(ラビ・ユダヤ教)をどこまで重視するかも対立が発生し、いよいよロシア・シオニズムが混沌としていた中で、1897年にヘルツルが第1回シオニスト会議をスイスのバーゼルで開催して世界シオニスト機構を設立するに至ってロシア・シオニズムに西欧ユダヤ人が合流することとなった。

この時点で出揃ったシオニズムの分派を整理しておく、次のようになる。まずロシア帝国のマスキリームの流れを汲む近代志向のシオニズム(ロシア・シオニズム世俗派)であり、ロシア帝国での生活をより重視するか否か、文化的なレベルでのネーションとしての「尊厳」も重視するか、それよりも土地との「結合」の方

を重視するかといった点で基本的には議論がされていた。移民先としてはパレスチナに一本化されていたが、いずれの場合も広域を国家として「切り取る」よりも、農業を中心としたユダヤ人の手による入植活動で土地と「結合」していく方針が立てられていた。それは、国民国家体系に基づく国際政治学的な観点で国家を持つというよりは、先述のように、ロシア帝国の中で、確固とした「本拠地」を持つネーションとしての地位を獲得する上での「担保」としてパレスチナが想起されていたからでもあったと言えよう。もう1つ、やがて力を持っていったのがユダヤ社会の困苦の中での民衆のユダヤ教離れを懸念したラビたちによるシオニズム（ロシア・シオニズム宗教派）であり、基本的にはラビ・ユダヤ教社会を保存した状態で安住できる場所に「転居」することが考えられていた<sup>8)</sup>。

そしてここで登場したのが、ヘルツルの西欧シオニズムである。後述する「ウガンダ」論争以降は「ユダヤ文化」を重視するシオニズムが西欧にも見られるようになっていったが、当時の西欧シオニズムはユダヤ的なものに一義的には関心を持たず、西欧に流入して反ユダヤ主義激化の原因にもなりかねない東方ユダヤ人を西欧シオニストが救済するといった慈善事業的なバターナリスティックな視点に立っていた(Reinharz [1975], Aschheim [1982])。彼らはパレスチナには固執しておらず、ともかくユダヤ人のための避難所としてある程度の規模の土地を国家として「切り取る」方針を掲げていた<sup>9)</sup>。

ところで、すでに述べたように、シオニズム論において、シオニズムの「東西」の相違は語られないわけではなく、むしろかなり実体的なものとして語られることすらある。研究書や教養書レベルでは、強調されることは少ないにしても大抵どこかで、とりわけ後述する「ウガンダ」論争との関連でそれは言及される。P・ダカレットが指摘するように、シオニズム研究にお

いては「東／文化的」「西／政治的」という二分法が用いられることが多い。そして通常、前者の代表としてはロシア・シオニズムの精神的支柱となったアハド・ハアム（A・ギンズブルクのペンネーム）が、後者の代表としてはヘルツルが挙げられる(Daccarett [2005: 317])。そしてここで「文化的」と言われるときは文字通り文化的な側面に限るという意味ではあまりなく（アハド・ハアム自身は文化的側面に重点を置いていたが）、「ユダヤに縁のあるものを重視する」という意味であり、要するに非リベラルで非合理的、偏狭とされる「エスニック・ナショナリズム」といった意味である。

ナショナリズム論に多少関心のある者には東西のナショナリズムを本質的に分けた「コーン二分法」を想起させるこうした見方は、ロシア帝国という場においてシオニズムが先述のようにある一定の目的合理性を携えていたことを考えると単なる偏見であるとも言えるが、「ウガンダ」論争において当時実際に東西シオニズムの相違が強調されたことを考えると、こうした見方が出てくることも不思議ではない。しかし問題は、果たしてロシア系のシオニズムははじめからエスニックな側面が強かったのか、ということである。

ロシア・シオニズムの古典『自力解放！—ロシアの同胞からの警鐘』(Pinsker [1882])をドイツ語で発表し、「ロシア・シオニズムの父」と言われるL・ピンスケルは、その後はリリエンブルムらの説得で移民先をパレスチナに一本化した。本書においてはパレスチナを最適としながらも、ともかく「我々自身の土地」の獲得が最優先であると述べていたことは比較的よく言及される事実である。さらに彼はロシアにおいてユダヤ人は人口過剰である定住区域において「寄生者」として他の民族のお荷物になっており、「余剰」は「他の場所へ運ばれるよう取り計らわなければならない」とも述べており

(Pinsker [1882: 21-2])、こうした論理はボグロム以降の東方ユダヤ人の流入に頭を悩ませていた西欧シオニストの論理に近い。

また、ピンスケルよりも数ヶ月先にシオニズム論(Лилиенблюм [1884a])をロシア語で発表していたリリエンブルムの議論からは揺るぎない経済生活の基盤を確立するという意味でのパレスチナ移住を説いている側面も強く窺える。リリエンブルムはパレスチナを「祖先の土地」などと並んで、しばしば「ユダヤ人のための避難所(приют)」と表現していた(Лилиенблюм [1884b, 1889])。つまり、ロシア・シオニストにおいても、苦境からの文字通りの逃避という契機が語られていたのであり、初期においては慈善事業的な側面を見出すことも不可能ではないのである。また、彼は将来のユダヤ人国家で話される言葉が英語やドイツ語でも構わないとまで述べていた(Gersh [1967: 144])。

他方、早くからヘブライ語を含む「ユダヤ文化」なるものを強調し、上記の二分法に合致しやすいアハド・ハムであるが、彼はパレスチナに小規模ではあってもユダヤ文化の「精神的中心」を建設することを訴えていただけであり、ユダヤ人の多くはディアスポラとして残り続け、そこでも「ナショナルな」文化を展開すると見通していたことは有名である。つまり、ヘルツル以前の時期のロシア・シオニズムで、文化も領土も両方とも譲れないという今日見られる典型的なエスニック・ナショナリズムとしてのシオニズムを唱えていた者は、少なくとも主要な指導者にはいなかったのである。

また、シオニズムをユダヤ人限定のものとし、そのユダヤ人の血縁的同一性についてはその範囲を含めて各分派を超えて合意があった(ラビ・ユダヤ教においてユダヤ人の母親から生まれた子がユダヤ人という定義が用いられていたことから、元来ユダヤ人の定義は近代における「人種」概念に対して親和性があったとも言え

よう)。そうしたこともあって西欧ユダヤ人ヘルツルの登場はロシアにおけるシオニズムの行き詰まりを打破するものとして基本的には歓迎されていた。ロシア帝国の中での「ローカルな」運動だったシオニズム運動を、「進歩」の先端を行き、今の言葉で言えば「グローバル・スタンダード」だった西欧世界の同化ユダヤ人が認めたことは、ロシア・シオニストにとって少なからず自信となり、そうした雰囲気はシオニストが多く投稿したヘブライ語紙『ハメリツ』などからも読み取れた(Greenberg [1976, vol. II: 176])。また、例えばリリエンブルムは「進歩」を盾にシオニズムを批判するウィーンのあるラビへの反論として、「最先端」のフランスなどにおける反ユダヤ主義とともに、「西欧ユダヤ人」ヘルツルなどを例にとって「進歩」の限界とシオニズムの必然性を論じていた(Лилиенблюм [1899: 37-44])。つまり、反ユダヤ主義やそれゆえのシオニズムへの道を汎ヨーロッパ的な必然性として説明する際の論理付けにおいても、「進歩」の先には西欧があるという想定が大きな意味を持っており、ヘルツルの登場はまさにシオニズムの正統性を証明するように思われたのである。

## VI. 動力源としての「東西」

### VI.1. 東西シオニストの対峙

ではなぜ、結果的にシオニズムの主流となったロシア・シオニズムは、実際には現在まで続くような典型的なエスニック・ナショナリズムになったのだろうか。もちろん世紀の転換期のロシア帝国におけるユダヤ人の困苦の悪化や思想状況の全体的な過激化、といったような通説的な理解も的外れではない。しかしそれだけではなかった。

前節で見たような共通点や利害の一致があった一方で、シオニズムに込めた目的が少なからず異なっていた「世俗派」と西欧シオニズムは



手順に関しても少なからず対立することとなった。とりわけ、本稿が照準している「世俗派」から見て、「東西ユダヤ人」をやはり意識していたヘルツルら西欧シオニストには、「ユダヤ的なもの」にあまりに関心なかったことのほかに、次のような問題があった。

まず、ヘルツルは、ロシア・シオニズムのそれまでの漸進的な入植活動を否定して西欧人としての自らの手法を前面に押し出した。ロシア・シオニズムが「近代的」な方法を知らないために行き詰ったと考えていたヘルツルは(cf. Vital [1982: 343])、外交活動によってパレスチナ地域をユダヤ人国家として「切り取る」ことを訴えていた。

そして、ヘルツルらは東方ユダヤ人社会内部の多様性に無頓着であり、一様に伝統的で自らとは異なる存在として捉えていた。しかしシオニズム以前からロシア帝国のユダヤ社会には、伝統的ラビ対マスキリームないし「世俗派」という決して一枚岩で捉えてしまってはならない構図が存在していたのである。マスキリームが始めたシオニズムは伝統的ラビ権力に対する対抗という意味も持っていた。ところがロシア・ユダヤ社会における「近代的」な要素に関知しなかったヘルツルらは、オリエンタリストイックな観点から、東方ユダヤ人大衆をシオニズムに動員しうる「真正な東方ユダヤ人の代表」としてむしろ「宗教派」を重んじたのである。「世俗派」らが多かれ少なかれ重視していた世俗的な「ユダヤ文化」を議題に挙げようとしなかったのは、この「宗教派」の反発を買わないための配慮でもあった(Luz [1988: 140-54], Salmon [1999])<sup>(10)</sup>。

ただ、Ch・ワイツマンらロシア系の若手が「民主派」を結成(1901年)してヘルツルらの「独裁」に対抗する動きが多少見られたにしても、それでもシオニズムを強力な運動に育てるという観点から、ヘルツルとの協調路線は辛う

じて保たれていた(Goldstein [1985])。だがそもそも、西欧ユダヤ人ヘルツルの人気を考えると、ロシア系が大きく出ることなどそもそもできなかったのである。ここで鍵を握るのが、例の「東西ユダヤ人」の「境界」である。ヘルツルの最大の批判者だったアハド・ハアムはスイスのバーゼルで開かれた第1回シオニスト会議に参加したすぐ後に書いた論考で、会議直後のロシア・シオニストたちの様子を不満たっぷりに次のように観察している。

代表者たちは帰郷して以来、民衆を集め、彼らが目撃した奇跡を幾度となく話して聞かせている。不幸な、飢えた民衆は聞き入り、熱っぽくなり、救済を期待している。なぜなら、「彼ら」つまり西欧のユダヤ人が計画したことを履行しそこなうことなどあるわけがないと思っているからである。(…)[(…)]メシアは我々の近くに来ている。偉業をなす時がやって来た。偉大なる人たち、西欧の人たちが我々の先頭に立って行進しているのだ]

(Achad Ha-am [1922: 32])

つまり、西欧近代が携えていたオリエンタリズムがここで力を発揮するのである。オリエンタリズムはまずは文字通りオリエントに投影されたものではあるが、翻ってそれはヨーロッパ内部も「東西」の尺度によって階梯を形成することになる(cf. Wolff [1994])。したがって、ロシア・シオニストが伝統と対抗して実質的には「西欧」である「近代」を志向し、そして西欧ユダヤ人と合流した瞬間に、彼らは「西欧」が先進的とされるヒエラルキーを持ったシステムに接続されてしまい、彼らが「東方」と見なされている以上、このシステムの内部では西欧ユダヤ人に従属せざるをえなくなるのである(例えば先のリリエンプルムの論理構成に端的に見

られるように「西欧」は正統性の源泉になりうるものだった)。まさにヘルツルのシオニズムに見出すことができるように、植民地主義者対原住民といったものに近い構図が成立することになる。

## VI.2. 「ウガンダ」論争とカウンター・オリエンタリズム

ところが、それにもかかわらず、「ウガンダ」論争（1903年～1905年）で両者は、「東方」が優位な形で決裂することとなった。オスマン帝国からのパレスチナの自治獲得の認可が依然として下りない中で迎えた1903年8月の第6回シオニスト会議（於バーゼル）において、ヘルツルはイギリス政府が提供を申し出た東アフリカの領土（ケニアであるが、誤って「ウガンダ」と呼ばれることが多かった）に、暫定的ではあってもユダヤ人国家を建設する提案を行った。ロシアで1881年のもの以上に大規模なボグロムが数ヶ月前に始まり、いよいよ東方ユダヤ人の困窮が深刻化していた中、東アフリカに調査団を派遣するか否かという初歩的な段階を巡って採決が行われ、比較的僅差で賛成が反対を上回った。しかしロシア・シオニスト「世俗派」はまさにヘルツルがユダヤ的なもの（パレスチナ）を無視したとして猛反発したのである。

ただし注意すべきは、反対派は確かに大抵はロシア系だったが、しばしば言われる、彼らが伝統的だったからパレスチナに固執した、といった偏見を伴った説明に反して、「宗教派」、つまりロシア帝国で最も伝統的な部分はヘルツル支持に回ったのである。パレスチナ以外の土地の方がメシア思想に抵触する恐れがなく都合がよく、困苦からの逃避という点で両者の目的は元来一致していたからである(cf. Luz [1988: Ch. 10])<sup>(14)</sup>。したがって、「ウガンダ」論争は発端においては「東西対立」であったわけではなく、西欧シオニスト、「世俗派」、「宗教派」の「三

角関係のもつれ」だったのであり、それが直後から「東西対立」へと読み替えられていったのである。

この「読み替え」に関して象徴的なのが反ヘルツルの筆頭として名前の挙がる後の初代イスラエル大統領ワイツマンである。彼は自伝(1949年)の中では、はじめから「反ウガンダ」だったと記しているが、実際にはヘルツルが東アフリカ案を提案した直後は、現実的な解決策であるとしてこの案には反対ではなかった。短期間での反対派への豹変は、まさにそれが政治的判断だったことを窺わせる(Reinharz [1985: 168-72])。第6回会議直後にワイツマンは、会議中パレスチナを視察していたロシア・シオニストの代表格M・M・ウスイシュキンに宛てた手紙の中で「パレスチナを手に入れることはできず、人々が飢えているのだからアフリカをつかみとらなければならないと、『ユダヤ人民』の名の下に言いそうなミズラヒー〔「宗教派」の組織〕と西欧シオニストの堅固なブロックを前にして我々は無力であるに違いありません」と危機感を募らせていた。だが「しかしもし我々がこれら全ての怒号に対して善意だけでなく実践的なプログラムで対抗することができるならば(…)我々は力を手にすることができるでありますよ！」とも書いていた(Weizmann [1972: 12])。

そしてワイツマンらが考案した「プログラム」とは、まさに「カウンター・オリエンタリズム」(対抗ないし防衛のためのオリエンタリズム)とでも言いうる対抗文化だったのである。そのからくりはこうである。「近代世界」における「東西」のヒエラルキーでは「西」に優位に立つことができないが、一般にユダヤ的なものから疎遠になっていた西欧ユダヤ人に対して、数の上では優位にあった東方ユダヤ人がシオニズムを、「ユダヤ」を強調した文化、つまり特殊主義に基づく対抗文化で染めてしまえばそこに西欧ユダヤ人が優位に立てる余地はなくなる。

東方ユダヤ人の方が「ユダヤ色」が濃いということは西欧ユダヤ人自身が認めていたことだった<sup>(12)</sup>。そして、ヘルツルがユダヤ人とは何の縁もない東アフリカを口にしたことは、絶好の機会だったのである。もちろん、ヘルツル側に付いていた「宗教派」にも対抗しなければならなかったから、いわゆる「宗教回帰」ということにはならず、実質的には「発祥の地」であるパレスチナ（エレッツ・イスラエル）やヘブライ語（シオニズム以前から世俗的なヘブライ語文化はナショナリストの間で小規模ながらある程度発展していた）、あるいはその実曖昧な「ユダヤ文化」といったユダヤ人の「歴史」や近代的な意味での「文化」にかかわる側面が強調されることとなった。

会議の数ヵ月後にウスイシュキンら反ヘルツル派がロシア帝国のハリコフに集まって議決した「ハリコフ決議」では、東アフリカ案がパレスチナを明記していた世界シオニスト機構の綱領に反するものであること、そして「ヘルツル博士の独裁政治（автократия）」への異議申し立てが記されていた（Heymann (ed.) [1977: 292-3]）。そのウスイシュキンは同志であるB・Z・モッソンソンに宛てた手紙（1903年）の中で、彼らの主張の要点を次のように述べていた。

シオニズムの重要な点はイスラエル民族（am israel）を救うこと〔つまりナショナリズム〕であって、ロシアとルーマニアの貧しい同胞（onei-achinu）を救うこと〔つまり慈善事業〕ではない。（…）シオニズムの基盤はロシアにあり、西欧ではロシア出身者にある。（Heymann (ed.) [1977: 190]）

ウスイシュキンは「ウガンダ」論争の最中の1904年に『我々のプログラム』を発表した。そこにおいて彼は、ヘルツル的な手法の重要性も認めつつ、また持論である実践的な入植活動を

掲げながらも、注目すべきこととして、同じ程度に、それまで彼自身は距離を置いていたはずのアハド・ハアム的な「ユダヤ文化」を強調した「総合シオニズム」を提唱している（Ussishkin [1905]）。

そしてヘルツルは「ユダヤ的なもの」が薄弱的な存在として描かれることとなった。ウスイシュキンは、ヘルツルの死後25周年を記念して出版された記念論集に「異邦人ヘルツル—シオニストの地平に昇った未知の指導者」と題して寄稿した回想記において、初めてヘルツルに会った時の印象を次のように記している。

彼には1つ大きな欠点がある。（…）彼はユダヤ人についてほとんど何も知らないし、だからシオニズムが外的な障害のみにぶつかっており、何ら内的な障害がないと思っ込んでいます。（Ussishkin [1929: 47-8]）

ウスイシュキンと並んで反ウガンダの筆頭となった、ロシア帝国出身のSh・レヴィンもやはり同じ論文集においてヘルツルをユダヤ人の「伝統」や「文化」に対して無頓着な存在として描いていた（Levin [1929]）。レヴィンに関して興味深いのは、問題が「東西」のレベルまで引き上げられて論じられている点である。1919年に出版した論集『束縛からの脱出』の第1章「東方からの光」において、彼は西欧における個人の、「ユダヤ」を犠牲にした解放と引き換えの新たな隷属（これは既述のようにアハド・ハアムがヘルツル登場以前から指摘していたものである）を指摘し、完全な代替案として、「ついに東方から光がやってきた」と記している。この「光」とは、ナショナリズムである。

ロシア革命の時になって、相対する力の争いが頂点に達した<sup>(13)</sup>。そして東方は西方に勝利したのである。東方においてだけでな

く、西方においても。それは我々のナショナルな意志の勝利である（…）。

(Levin [1919: 3-4])

1917年のバルフォア宣言はシオニズムの現実性を感じさせる最初の試金石となったユダヤ史上の一大事件であるが、その後の世界についてレヴィンは次のように展望している。

この新たな歴史的事実は西方で生じる全ての変化や変容に勝るだろう。西方は進歩するだろうが、東方は復活するのである。人間の文明は最も高尚なレベルに達するだろう。（…）複数のネーションの消去ではなく、複数のネーションの間での平和、これこそが東方の理想であり、それは、西方で生まれた間違っただ理想、すなわち諸ネーションの同化、それぞれの個性の否定、つまりその論理的帰結として諸ネーションの隷属化と抑圧を可能にしてしまう理想とは対照的である。 (Levin [1919: 33-4])

奇しくも、心労重なつたヘルツルは「ウガンダ」論争勃発のちょうど翌年に急逝し、ロシア系の覇権は決定的なものとなった。その後のイスラエル国家の中枢を形成することとなったシオニストが移民した第2次アリアーが始まったのはこの頃であるが、この移民に特徴的なのは、ユダヤ人としての血縁的な同一性の想定に加えて「エレット・イスラエル（イスラエルの地：パレスチナ）」（領土）と「ヘブライ語文化」（文化）というエスニック・ナショナリズムの3本柱を堅持していたことである。

以上のように見ると、「部外者」としてのヘルツルに代表される「西欧ユダヤ人」（さらには「西欧」全般）という「重要な他者」が、シオニズムがその後パレスチナで展開することとなった基礎を確立する上で大きな契機となった

ことが窺える。いまやシオニズムは積極的に「東方産」として描かれるようになり、その正統性は「ユダヤ的であること」に求められるようになったのである。欧米列強の多大な支援の下とは言え、今日までアラブ人の抵抗にもかかわらず「エレット・イスラエル」の領土を死守し、20世紀初頭までヨーロッパに限らずユダヤ人で話す者などまずいなかったヘブライ語（当時の大半の東方ユダヤ人の母語は言語系統の異なる、ドイツ語の「垂流」ないし「ジャルゴン」とされていたイディッシュ語である）を、いまやごく一部の新移民を除いてユダヤ人（と多くのイスラエル・アラブ人までも）ならば誰もが話す、いわゆる「国語」にまで引き上げた思想的な原動力の1つはここにあったと言えよう。

## VII. 終わりに—なぜ「ロシア」は消えたか

結局外交交渉というヘルツルの手法を引き継いでイギリスからバルフォア宣言を引き出したのはワイツマンだった。ただ、そのワイツマンもウスイシュキンの実践的な入植活動を進める労働シオニズム（ロシア領ポーランド出身で初代イスラエル首相となったD・ベングリオン<sup>(1)</sup>がその中心となった1920年代初頭にパレスチナでの地位を確立した）の覇権の中で、浮いた存在となっていった。「ウガンダ」論争以降、「東西」のヒエラルキーの逆説的な効果として、シオニズムが少なからず「ユダヤ」の内容を問う特殊主義に全体として変遷していたことは確かである。

だが、ロシア・シオニズムが、「東西」ヒエラルキーを根本的に破壊するのではなく、普遍性を標榜する近代主義的なそのヒエラルキーに対して「ユダヤ」を強調する特殊主義で対抗したこと、換言すればオリエンタリズムに対してアンチ・オリエンタリズムではなく、カウンター・オリエンタリズムで対抗したことは、根底においてはこのヒエラルキーを強く是認していたと

いうことでもある<sup>(15)</sup>。それゆえに、ロシア系が覇権を手中に収めたことによってもはや「東方」として気張る必要性が薄れ、かつパレスチナにおいて彼ら以上に「東方」であることについてヨーロッパ全域で了解のあったアラブ人の存在を前にした時、「ユダヤ」を強調する文化は維持しつつも「東方」を脱色することで、サイドがシオニズムの戦略として指摘したように、シオニストは遠慮なく「西洋」を体現する存在として振舞うこととなった、ということなのではないだろうか<sup>(16)</sup>。彼らはパレスチナに足を踏み入れる前に、「東」であることと「西」であることが現実的に何を意味するのかをすでに身をもって経験していたのである。だからこそ、敢えて「ロシア」を語ることはなかったし、「幸い」シオニストが自らを「西側」に位置づけることに対して誰も邪魔しなかった。修辭的な次元での関連ではあるが、国際政治的にも、イスラエルは「西側」の代表となった米国と早くから同盟を組む一方で「東側」のソ連との同盟には消極的であり、やがてソ連はイスラエルに対して批判的になっていった。こうして「東西」の境界はイスラエル／パレスチナにおいて、立場の如何にかかわらず、「ヨーロッパ系ユダヤ人（アシケナジーム）」対「中東系ユダヤ

人（ミズラヒーム）およびアラブ人」という形できれいに引かれることとなり、「東西」という磁力は、冒頭の研究史の概観で見たように、オリエンタリズムとアンチ・オリエンタリズム<sup>(17)</sup>という形をとりながら依然としてそこに働き続けている。

そして「ロシア」は抜け落ちる。ソ連崩壊を前後して、かなりの程度「ロシア化」が進んだ旧ソ連系新移民が流入し、今ではイスラエル人口の2割を形成しているが、彼らがイスラエルで受けたのは別の系統のユダヤ人としてのまなざしだった<sup>(18)</sup>。

以上のように、シオニズムという磁場において、「東西」という解釈図式は今日に至るまで1つの「独立変数」としての重要性を、つまりは民族史や地域史には還元できない「それ自体の歴史」を、本質的なところで持ってきた。それは俗流のオリエンタリズム批判や反批判が想定するよりもはるかに錯綜していながら、そうした俗流に収斂することによって空白もつくり出している。

\* 本稿は文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

## 註

1. 例えば1900年のユダヤ人口分布では、全世界のユダヤ人口約1,060万人のうち、ロシア帝国（1897年）が約519万、ハプスブルク帝国が207万、米国が100万、ドイツが52万、ルーマニアが26万、イギリスが22万、パレスチナが8万だった。
2. 一般に、とりわけ「西欧～」に対しては「東欧～」とされることも多いが、人口の中心がロシア帝国領にあったことから現在の「東欧」のイメージとのずれを防ぐため、またドイツにおいて彼らがOstjuden（Eastern Jews）と呼ばれていたことを受けて、本稿では基本的には「東方～」に統一する。
3. もちろん、「東方」の中でも、例えばポーランド・ユダヤ人は「中欧ユダヤ人」と自己定義していることがあるなど（後述するベングリオンもそうである）、一枚岩ではなく、こうした点も今後検証されるべきだが、結局のところ「より東か、より西か」という問題に収斂することになる。
4. 詳細については鶴見[2005: 第2章・第3章]および鶴見[2007]を参照。

5. 概ね現在のリトアニア、ベラルーシ、ウクライナ、モルドヴァに相当する地域。ロシア領ポーランドも法的には若干異なったが一般には便宜上「定住区域」と呼ばれることも多い。
6. この側面に関する近年の研究動向を概観したものとしては例えば塩川[1999]を参照。
7. ユダヤ史研究者Z・ガリリが示唆するように、ソ連時代に入ってから、少なくともソ連内部に居住していたシオニストは、ソ連内部でユダヤ人の集団としての地位をどう引き上げるかを考えていたし、もっと素朴な日常的なレベルにおいても、いわゆるロシア文化の影響はパレスチナへの移民の間に色濃く残っていた。だが、こうした点を移民自身が振り返ることはほとんどなかった(Galili [2003])。
8. また、本稿では扱わないが、1900年前後からユダヤ人のプロレタリア化の認識などがあいまって、マスキリームの流れを汲むユダヤ知識人の間で社会主義色の強いシオニズムも見られるようになった（いわゆる社会主義に一定以上に忠実な分派はやがてパレスチナで展開したシオニズムの本流からは距離を取り、「離散地」での生活に半ば特化していった）。
9. 後述の「ウガンダ」論争以降の主流のシオニズムも含めて表にすると以下ようになる（現在のシオニズムは、それに加えて、ホロコーストの重視をはじめとした「苦境からの逃避」の重要度が増し、ユダヤ教との妥協の度合いが増えたと言える）。なお、本稿での区分は「東西」図式の影響を見るための区分であり、一般的に採用されている「文化的シオニズム」「政治的シオニズム」などといった区分とは異なる筆者独自のものである。一般的な区分についてはShimoni[1995]を参照。

|            | ネーションであること（尊厳）の担保 | 苦境からの物理的な逃避 | 伝統的ユダヤ教 | 世俗的ユダヤ（ヘブライ語）文化 | パレスチナ | ユダヤ人の歴史的・人種的同一性 |
|------------|-------------------|-------------|---------|-----------------|-------|-----------------|
| 「世俗派」      | ◎                 | △           | ×       | △               | ○     | ◎               |
| 「宗教派」      |                   | ◎           | ◎       | ×               | △     | ◎               |
| 西欧         | △                 | ◎           |         |                 | △     | ◎               |
| ウガンダ以降の主流派 | ◎                 | △           | ×       | ◎               | ◎     | ◎               |

◎=重視（自明視） ○=やや重視 △=場合（人）による ×=反対 空欄=無関心

なお、西欧シオニズムもユダヤ人の歴史的・人種的同一性を想定している点では同じである一方で、H・アーレント(Arendt [1958: 227-43])が指摘するとおり、ロシア・東欧においてユダヤ人が、国家を持っていないにもかかわらずエスニックなアイデンティティを確保している部族的な意味での民族の模範となるほどエスニシティが明確で、また、ロシア・東欧が、諸ネーションが領域的な責任を負わない領域的に流動的な帝国の環境下に置かれていたことが関係してか（本稿では詳述しないが、ロシア系と西欧系のネーション観の相違はそれぞれの環境が帝国と国民国家として異なっていたことに少なからず起因するように思われる）、「世俗派」が元来エスニック・ナショナリズム（アーレントの言う東欧的な「部族的（tribal）ナショナリズム」）に近い性格を持っていたとも言えるが、本稿は、そうした初期条件だけではその後のより強いエスニック・ナショナリズム化は起こらなかったとの立場をとる。

10. 第1回シオニスト会議は当初ミュンヘンで開催される予定だったが、地元のラビらの猛烈な反対にあってバーゼルに変更せざるを得なかったという苦い経験も「宗教派」を重んじた背景にあった。

11. なお、民衆の苦悩からの早急な脱出を第一に考える社会主義シオニストもロシア系が多かったが東アフリカ系支持に回った。
12. しかも西欧ユダヤ人も時に、オリエンタリズム一般にしばしばあることだが、例えばヘルツル自身、ロシア系が「ほとんどのヨーロッパ・ユダヤ人が失ってしまった内的な一体性を持っている。(…) 彼らの気質は純であり無傷である」として理想化もしていた(Herzl [1973: 154])。
13. 明示されていないが、1917年革命のことを言っていると考えると間違いないだろう。少なくとも社会主義を標榜する労働シオニズムが優勢だったパレスチナにおいて、革命以降1920年代まではソ連に対してかなり好意的であり(Shapira [1988])、いわゆる文明論的にも東方が西方に勝利したと見られていたものと思われる。
14. 第2次アリヤー（移民）の時期に、東アフリカ系への対抗から予定より早くパレスチナに渡ったと回想しているベングリオンもまた、ワイツマンの生誕100周年記念論集への寄稿において、「ユダヤ的ユダヤ人」ワイツマンと対比して、ヘルツルの部外者性やヘルツルのシオニズムの慈善事業性を指摘していた(Ben-Gurion [1974: 11-2])。
15. わかりやすい例としては、シオニズム以降ヤッファの北隣に建設されたテルアビブ（1909年起工式）は住民の多くがロシアおよびポーランド系だったにもかかわらず、結局は早くからかなりの西欧志向の都市となっていた(Helman [1999])。
16. 第1次大戦終結後の第3次アリヤー以降はポーランド系（大半はロシア帝国領だが、しばしば「ポーランド・ユダヤ人」「中欧ユダヤ人」などと自己定義してもいた）、さらにはナチスの政権獲得と米国の移民制限などによりドイツ語圏系が多く流入するようになったが、管見の限りでは彼らヨーロッパ系の間で「東西」が顕在化することは、少なくとも「ウガンダ」論争までの状況と比べればはるかに少なかったように思われる。「東方」の覇権がすでに確立していたことのほかに、建国前後に中東系ユダヤ人が大量に流入したことによってユダヤ人内部でもより「東方」の要素が加わったことも関係していよう。この点については今後詳細に検証したい。
17. アンチ・オリエンタリズムは基本的にはアシュケナジームのアラブ人に対する優越を解除し、両者が生命として等価であることを説くものであるが、実際にはしばしばオクシデンタリズムに転化する。
18. もっとも、ここでも「東西」は発動し、ヨーロッパの一部を自認する旧ソ連西部出身で、一般に比較的高学歴である彼らはロシア文化に誇りを持っており、彼らにとって「中東」のイスラエル文化は少なくとも羨望の対象ではなく、今度はそれゆえに彼らの間で「ロシア」を前面に出した文化が促進される。他方、米国へ移民した旧ソ連系移民は米国文化の方が優れていると感じているとの研究もある(Remennick [2004: 434])。とはいえ、彼らの「ヘブライ化」は着実に進行しており、また彼らは対パレスチナ人政策に関しては総じて右寄りであることからイスラエル社会の既存の「東西」図式は拡大再生産の過程にあるとも言える。

## 文献

- Achad Ha-am (1922) *Ten Essays on Zionism and Judaism*, London: George Routledge & Sons.
- Almog, Shmuel (1987) *Zionism and History: The Rise of a New Jewish Consciousness*, New York: St. Martin's Press.
- Arendt, Hannah (1958) *The Origins of Totalitarianism*, Cleveland: Meridian Books.
- Aschheim, Steven E. (1982) *Brothers and Strangers: The East European Jew in German and German Jewish Consciousness 1800-1923*, London: The Univ. of Wisconsin Press.
- Avineri, Shlomo (1981) *The Making of Modern Zionism: The Intellectual Origins of the Jewish State*, London: Weidenfeld and Nicolson.

- Ben-Gurion, David (1974) "Chaim Weizmann: Champion of the Jewish People," in Leon, Dan, and Yehuda Adin, (eds.), *Chaim Weizmann: Statesman of the Jewish Renaissance, The Chaim Weizmann Centenary, 1874-1974*, Jerusalem: The Zionist Library, 11-9.
- Daccarett, Paula (2005) "1890s Zionism Reconsidered: Joseph Marco Baruch," *Jewish History*, 19: 315-45.
- Eisenstadt, Shmuel N. (1967) *Israeli Society*, New York: Basic Books.
- Edelheit, Hershel and Abfaham J. Edelheit (2000) *History of Zionism: A Handbook and Dictionary*, Boulder: Westview Press.
- Finkelstein, Norman G. (2003) *Image and Reality of the Israel-Palestine Conflict*, second edn., London: Verso.
- Frankel, Jonathan (1981) *Prophecy and Politics: Socialism, Nationalism, and the Russian Jews, 1862-1917*, Cambridge: Cambridge UP.
- (1992) "Modern Jewish Politics East and West (1840-1939)," in Zvi Gitelman (ed.) *The Quest for Utopia: Jewish Political Ideas and Institutions through the Ages*, New York: M. E. Sharpe, 81-103.
- Galili, Ziva (2003) "The Soviet Experience of Zionism: Importing Soviet Political Culture to Palestine," *The Journal of Israeli History*, 24(1): 1-33.
- Gersh, Irving (1967) *Moshe Leib Lilienblum: An Intellectual Biography*, Ph.D. dissertation, Brandeis University.
- Goldstein, Yosef (1985) "Herzl and the Russian Zionists: The Unavoidable Crisis?" *Studies in Contemporary Jewry*, II: 208-26.
- (1995) "Herzl's Place in Zionist Historiography," *Studies in Contemporary Jewry*, XI: 195-203.
- Greenberg, Louis ([1944-6]1976) *The Jews in Russia: The Struggle for Emancipation*, Two vols. in one, New York: Schocken Books.
- Helman, Anat (1999) "East or West? Tel-Aviv in the 1920s and 1930s," *Studies in Contemporary Jewry*, XV: 68-79.
- Hertzberg, Arthur (1989) *The Jews in America, Four Centuries of an Uneasy Encounter: A History*, New York: Simon and Schuster.
- ([1959]1997) "Introduction," in *idem.* (ed.), 15-100.
- (ed.) ([1959]1997) *The Zionist Idea: A Historical Analysis and Reader*, Philadelphia: The Jewish Publication Society.
- Herzl, Theodor (1896) *Der Judenstaat: Versuch einer modernen Lösung der Judenfrage*, Leipzig und Wien: M. Breitenstein's Verlags-Buchhandlung.=(1991) 佐藤康彦(訳)「ユダヤ人国家」同(訳)『ユダヤ人国家：ユダヤ人問題の現代的解決の試み』法政大学出版局, 1-103.
- (1973) *Zionist Writings: Essays and Addresses: Volume One 1896-1898*, New York: Herzl Press.
- Heymann, Michael (ed.) (1977) *The Uganda Controversy: The Minutes of the Zionist General Council*, vol. II, Jerusalem: Haziyonit Publishing House.
- Институт востоковедения, Академия наук СССР (1977) *Международный сионизм: история и политика*, Москва: Издательство «Наука».
- Khazzoom, Aziza (2003) "The Great Chain of Orientalism: Jewish Identity, Stigma Management, and Ethnic Exclusion in Israel," *American Sociological Review*, 68: 481-510.
- Kimmerling, Baruch (2001) *The Invention and Decline of Israeliness: State, Society, and the Military*, Berkeley: Univ. of California Press.
- Klier, John D. (1986) *Russian Gathers Her Jews: The Origins of the "Jewish Question" in Russia, 1772-1825*, Dekalb: Northern Illinois UP.
- (1995) *Imperial Russia's Jewish Question, 1855-1881*, Cambridge: Cambridge UP.



- Lederhendler, Eli (1989) *The Road to Modern Jewish Politics: Political Tradition and Political Reconstruction in the Jewish Community of Tsarist Russia*, New York: Oxford UP.
- Levin, Shmarya (1919) *Out of Bondage*, London: Hendersons.
- (1929) “Continuity and Creation: The Balance between the Tradition and the New,” in Weisgal (ed.), 101-3.
- Лилиенблом, М. Лейб([1881]1884a) “Общеврейский вопрос и Палестина” в кн. *О возрождении Еврейского народа на св. земле его древних отцов*, Одесса, 3-13.
- ([1883]1884b) “Наше народное дело,” в кн. *О возрождении Еврейского народа на св. земле его древних отцов*, 13-63.
- (1899) *Палестинофильство, сионизм и их противники*, Одесса: Я. Х. Шермана.
- Luz, Ehud ([1985]1988) *Parallels Meet: Religion and Nationalism in the Early Zionist Movement (1882-1904)*, Philadelphia: The Jewish Publication Society.
- Nathans, Benjamin (2002) *Beyond the Pale: The Jewish Encounter with Late Imperial Russia*, Berkeley: Univ. of California Press.
- Pinsker, Leo (1882) *Autoemancipation! Mahnruf an seine Stammesgenossen von einem russischen Juden*, Berlin: Commissions-Verlag von W. Issleib.
- Reinharz, Jehuda (1975) *Father Land or Promised Land: The Dilemma of the German Jew, 1893-1914*, Ann Arbor: Univ. of Michigan Press.
- (1985) *Chaim Weizmann: The Making of a Zionist Leader*, London: Brandeis UP.
- Remennick, Larissa (2004) “Language Acquisition, Ethnicity and Social Integration among Former Soviet Immigrants of the 1990s in Israel,” *Ethnic and Racial Studies*, 27(3): 431-54.
- Said, Edward W. (1978) *Orientalism*, New York: Georges Borchardt.=(1993) 板垣雄三・杉田英明(監修)・今沢紀子(訳)『オリエンタリズム』(上・下)(平凡社ライブラリー版)平凡社.
- (1979) *The Question of Palestine*, New York: Vintage Books.=(2004) 杉田英明(訳)『パレスチナ問題』みすず書房.
- Salmon, Yosef (1999) “Herzl and Orthodox Jewry,” in Gideon Shimoni and Robert S. Wistrich (eds.), *Theodor Herzl: Visionary of the Jewish State*, Jerusalem: The Hebrew Univ. Magnes Press, 294-307.
- Shafir, Gershon, and Yoav Peled (2002) *Being Israeli: The Dynamics of Multiple Citizenship*, Cambridge: Cambridge UP.
- Shapira, Anita (1988) ““Black Night—White Snow” : Attitudes of the Palestinian Labor Movement to the Russian Revolution, 1917-29,” *Studies in Contemporary Jewry*, IV: 144-71.
- Shimoni, Gideon (1995) *The Zionist Ideology*, Hanover: UP of New England.
- 塩川伸明 (1999) 「帝国の民族政策の基本は同化か？」『ロシア史研究』64: 24-33.
- Spinger, Anrnold (1980) “Enlightened Absolutism and Jewish Reform: Prussia, Austria, and Russia,” *California Slavic Studies*, XI: 237-67.
- Stanislawski, Michael (1983) *Tsar Nicholas I and the Jews: The Transformation of Jewish Society in Russia, 1825-1855*, Philadelphia: The Jewish Publication Society of America.
- 鶴見太郎 (2005) 『シオニズムの歴史社会学：ロシア帝国とナショナリズム』東京大学大学院総合文化研究科提出修士論文.
- (2007) 「ロシア帝国とシオニズム：「参入のための退出」、その社会学的考察」『スラヴ研究』54.
- Ussishkin, Menahem M. (1905) *Our Program*, New York: Federation of American Zionists.
- (1929) “Herzl the Stranger: The Rise of the Unknown Leader on the Zionist Horizon,” in Weisgal (ed.), 47-8.

白杵陽 (1998) 『見えざるユダヤ人：イスラエルの〈東洋〉』 平凡社.

Vital, David (1982) *Zionism: The Formative Years*, Oxford: Oxford UP.

Weinerman, Eli (1994) "Racism, Racial Prejudice and Jews in Late Imperial Russia," *Ethnic and Racial Studies*, 17: 442-95.

Weisgal, Meyer W. (ed.) (1929) *Theodor Herzl: A Memorial*, New York: The New Palestine.

Weizmann, Chaim, 1972, *The Letters and Papers of Chaim Weizmann: English Edition, Series A: Letters*, vol. III September 1903-December 1904, London: Oxford UP.

Wolff, Larry (1994) *Inventing Eastern Europe: The Map of Civilization on the Mind of the Enlightenment*, Stanford: Stanford UP.